

『奥の細道』における歌枕の描写とその有無についての考察

Matěj Vozábal (ヴォザーバル・マテイ)

カレル大学哲学部アジア研究所日本学科・修士二年

松尾芭蕉の『奥の細道』は、芭蕉とその同行者の曾良が1689年に江戸を発ち、陸奥・北陸を巡った旅を描いた俳文及び紀行文である。二人の旅の目的は西行等の以前の時代の歌人に詠まれた名所・歌枕を訪ねることであり、それゆえ本作品には歌枕が数多くみられる。芭蕉が実際に行った旅に基づいた作品であるが、曾良の旅日記との比較を通じて、その実際の旅とは異なる虚構の要素も多いことが判明している。その虚構の大部分は西行の旅姿を連想させ、本作品に描く旅を昔の歌人の旅に近づけるための試みであると考えられる。そのように『奥の細道』では、芭蕉の旅と西行等の歌人の旅という二つの空間が共存し重ね合わせられていると思われる。

本発表では、本作品の中心にある歌枕に着目する。本作品における歌枕は、名歌を連想させると同時に実際の旅の舞台でもあり、上記に言及した二つの空間を繋げる役割を持つ。また、虚構だと判明する歌枕の描写がほぼ見られないが、芭蕉が訪ねたにもかかわらず本作品に登場しない歌枕の例もある。その記述されなかった歌枕をいくつか取り上げ、本作品に登場する歌枕の描写における具体例との比較を行う。次、記述されなかった歌枕の特徴を明らかにし、記述されなかった原因を考察してみたい。